『大いなる遺産』において光がピップに見せる像

幻燈とジオラマの視覚効果

原田　昂

序論

チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens）は、自らの旅行体験を綴った『イタリアのおもかげ』（*Pictures from Italy*）の中で、幻燈やジオラマの視覚効果を、文章によって再現しようとしたことが指摘されている。これらの光学装置によって映像が映し出されるのを見ることは、作者と読者が共通して知る体験であり、読者には直接知覚しえない体験や印象を伝える上で有用である。しかし、ディケンズによって書かれた他の作品については、幻燈やジオラマとの関連性はあまり指摘されていない。本発表は、『大いなる遺産』（*Great Expectations*）において、光学装置から着想を得たと思われる表現が見られることを指摘する。そのために本発表では、3 つの現象を分析する。1 つ目は、光が物語の主人公ピップ（Pip）に、何らかの光景を見せることである。2 つ目は、光がピップに、実在しないものを見せることである。3 つ目は、死を覚悟したピップが過去の体験を見る時に、光が言及されることである。

本発表には、2 つの意義がある。1 つ目は、光学装置を文章表現に応用することの重要性を明らかにすることだ。光学装置と関連する表現が、フィクション作品において語り手と読者の間でそれぞれの認識を一致させる働きをしているとすれば、今後の研究に発展性を残す。2 つ目は、『大いなる遺産』を新しい視点から読むことを可能にすることだ。この物語は、光と関係性が深いことが、これまでに指摘されている。しかし従来の研究は、ピップとカメラの関係性に注目するあまり、この物語の中で描かれる光が、画像を投影したり、動画のように見せたりしている点を見過ごしている。本発表は、幻燈やジオラマに焦点を当てることで、これまでに報告されていない方法で、物語の中で描かれる光を読み解く。

1. 光が見せる風景やその変化

まず、『大いなる遺産』において光は、ピップに何らかの光景を見せる働きをする。ピップは、匿名の人物から財産を受け取ることを決めた翌日、朝日に照らされた自身の前途が、これまでとは全く違って見えるという体験をする。彼はその翌日にも同じように、自身の“view”が朝日に照らされるのを見る（117）。この“view”という語は、ピップが今後経済的に豊かになり、ロンドンに移り住み、紳士としての教育を受けることを踏まえると、前途という意味で理解することができる。しかしこの語は、光景という意味でも理解することができる。なぜなら彼は、彼が大金を得る見込みであることを知った周囲の人物が態度を変える光景を目の当たりにするからだ。つまりこの場面でピップは、自分の目に見えるものが光に照らされ、変化するのを見る。

またピップは、故郷を離れロンドンへ向かう際に、まるで彼に世界を見せるかのように霧が晴れるのを目撃する。ここでは光が差すとは直接書かれていないが、霧の薄さを表す形容詞として光を意味する“light”が使われ、ピップが考え事をしていることを伝えるために反射することを意味する“reflecting”が使われる。これらの語が使用されることで、霧の晴れ間から光が差したことが表現される。

さらにピップは、ロンドンで暮らしている時に、部屋の外の階段を上ってくる足音を聞く。彼は最初、この足音から死んだ姉の足音を連想して驚くが、階段のランプが消えていたことを思い出し、部屋の外に出て自分のランプで来訪者を照らす。この時、ランプの光が当たる範囲が絞られているため、ピップは来訪者の動きに合わせて、自分のランプを動かす。現実世界において幻燈で画像を投影する際、光源を動かせばそれに連動して、投影される画像もまた動く。この関係性はまさに、ピップのランプと来訪者の関係性と合致する。さらに、現実世界では幻燈の主な使い道として、幽霊ショーが人気であった。ピップが死んだ姉の足音を思い出すことは、この場面と幻燈の関係性を強調している。これらの場面では、幻燈やジオラマの仕組みが最も明確に利用されている。

2. 光が見せる錯覚―怪物や幽霊

『大いなる遺産』において光は、物や人の実際とは異なる姿を投影する役割も果たす。第 45 章でピップは、光の作用によって錯覚を見る。彼は自宅に帰ってはいけないと警告され、ハマムスで宿を取る。その際彼は、2 度にわたって様々な錯覚を体験する。この場面でピップが最初に見るのは、無数の目だ。この目は実際には、ろうそくを運ぶための台に空けられた穴が、ろうそくの光によって壁に映し出されたものだ。さらにピップは、

2 度の錯覚体験両方の終わりにも、この無数の目を見る。ピップの錯覚は、光によって投影される同じ映像をその始まりと終わりに持つことから、1 つの幻燈ショーと捉えることができる。

一方、第 38 章では、光に照らされるミス・ハヴィシャムがピップの目には幽霊に映る。語り手のピップは、ミス・ハヴィシャムの部屋の中で燃えるろうそくの光に度々言及する。その時ミス・ハヴィシャムの姿は、“a very spectre”や（228）、“[a] ghostly reflection thrown large by the fire”となる（229）。その後、ミス・ハヴィシャムの屋敷に宿泊したピップは、手に持っているろうそくの光に照らされてこの世のものと思われない姿に見えるミス・ハヴィシャムを目撃する。これらの場面は、ピップの体験を伝えるために光学装置が文章表現に応用される例として挙げられる。

3. 光が見せる過去の記憶

『大いなる遺産』において光は、死の間際に思い起こす過去の記憶とも関連性がある。第 53 章でピップは、オーリック（Dolge Orlick）に捕まり、死を覚悟する。この場面ではオーリックが灯す火が、度々光源として機能する。この時ピップは、そこにある何かではなく、自分の過去の記憶や体験が見えたと言う。さらにここでは、光と映像に速さという要素が結びつく。ピップが“[m]y rapid mind”によって自身の記憶を視覚化する時（317）、彼は親しい人たちが素早く流れ去る映像を見る。それだけでなく、彼の速まる精神は、ピップの姉が何者かに襲われ、病気になり、亡くなるまでの時間経過や、ピップが記憶する場所の空間的つながりなど、場面の移り変わりをピップに見せる。この特徴はこの場面に、『大いなる遺産』と光学装置の関係性を考える上で、他の場面とは異なる重要性を与えている。

結論

以上の通り『大いなる遺産』では、何かが光を発している時にピップが何かを見る場面や、光がピップに何かを見せる場面が複数見られる。光と関連する場面でピップが見るものは、実体を持つ風景や人物の動きから、実体を持たないピップの空想や過去の体験まで様々である。しかし、それらはどれも、現実世界における幻燈やジオラマの仕組みと重ね合わせられる。

引用文献

Dickens, Charles. *Great Expectations*. W. W. Norton, 1999.